
叶わない恋

和茶巣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

叶わない恋

【Zコード】

N6712Y

【作者名】

和茶巣

【あらすじ】

何をやるにもやる気がでなかつたある男子。

中学に入り部活紹介の時にみた吹奏楽部に衝撃を受ける

その先生に恋した生徒の話。

そんな、BLな物語です。

大阪の学校なのでほぼ大阪弁になると思いますwww

プロローグ

俺には好きな人がいる。

その恋は絶対にかなわない。

自分ではわかっている。

だけど、何度も何度も諦めようとしても駄目だった。

なんで、俺はこの人に恋をしたんだろう？

あなたの目には俺はどんな風に映っていますか？

やつぱり、ただの生徒にしか見れないですよね？

もし、ちがう存在に映っているなら俺は死ぬほど嬉しいです。

どうすれば、好きになつてくれますか？

頑張ってる子が好きつて言つてましたね。

すごく頑張れば誉めてくれますか？

好きになつてくれますか？

大好きです先生。

こんなに人を思うのは初めてです。

なので、俺を好きになつて下さい。

お願ひします。

それが、ぼくの願いです。

始まり（前書き）

長嶋 晃（ながしま あきら）

この物語の主人公

何をやるにもやる気がでなかつた。

中学に入り部活紹介の時にみた吹奏楽部に衝撃を受け、入る事を決心する。

普段はテンションが高くてイタイところもあるが、皆に好かれている。

常にメガネをかけている。

始まり

俺は中学に入つて何もやる気はなかつた。いつも何もない日々。正直言つて退屈だ。

次の時間は部活紹介らしい。

俺は体育館へと足を動かした。

俺は衝撃を受けた。

お世辞にも上手いとも言えないが、かつていいとは思った。俺はこの部活に入らうと決心した。

タツタツタツ

「よつわわわ お前はなんの部活にはいる?」

「俺は吹奏楽部に入らうと思つてゐる」

「マジかよー 意外だなー!」

「そつか? どうにこじろ俺は運動音痴だから、運動部は無理だし

ww

「 さうだよな WWW まあ、頑張れ！ 応援するからなー 」

「 サンキュー！ お前もがんばれよーーー 」

そう俺は決めた。

この部活に入つて今までの自分を変えると。
それが、すべての始まりだと知らずに。

「ああもう！！」

俺は完全に迷っていた。

なんてこんなに広いんだ！」

吹奏楽部は県学に行きたしのは僕はどけはいるんだ

卷之三

「はあ、ついでねえな……。」

バンツ

「痛つ！！」

俺は悩んでいると、誰かにぶつかつたらしい。

「ああ！！！ごめん！君大丈夫？」

優しい声だな。

「ああ、俺は大丈夫です。俺の方こそすみません。よか見歩いていたんで。」

「よかったです。それじゃね。」

「あつ、この人……」

「ちょっと待って下さ……もしかして、さつさく吹奏楽部の演奏で指揮をしてた人にはですか？」

「ん？ ああそうだよ。ビリして？」

「やつた……！」

「今俺、見学に行こうと思つてたんですけど、道に迷つて……。」

「あつ、やつなんだ。 やつ、俺も部室に行くからついておいで。」

「あつ、優しい人だな……。」

つか、この人身長ちつさにな。

「？ どうかした？」

「あつ！ 何でも無いです！」

「さう？ ついておいで。」

「はー。」

「そういえば、まだ名前を聞いていなかつたね。名前なんていつ
んだい？」

「あつ、俺の名前は長嶋 晃つてこます！」

「長嶋かわかつた。覚えておくよ。」

「よひこべお願いします。つてあの、今さらなんですか？」

「どうした？」

「俺、先生の名前知らないんですけど……。」

「ああ、そういえば教えてなかつたつ。『めんな』」

「いや、全然いいです……。謝りないでください。」

「はははは 焦つてかわいいな わわ

なつ／＼＼

この人！－

「からかわないでください！ それより名前を教えてください……。」

「『めん』めん ウウ 俺の名前は野川 新司 今、三年の理科を担
当してこる、学年主任だ。」

学年主任って結構偉い人なんだな…。

「野川先生ですね！ 改めてよろしくお願いしますーーー！」

「ああ。 つてもうつくからな。」

「はいー！」

普通に優しくてかっこいい人だな…。

「長嶋、驚くなよ。」

「へ？ 何がですか？」

そういうって、野川先生は音楽室のドアを開けた。

野川 新司（のがわ しんじ）

三年の理科を担当している、学年主任の先生。

とても、生徒思いのとても優しい。

まだ、何か隠された事がいっぱいある謎の多い人物。

身長が男性なのに、164? しかなく、身長が低いとか言われると落ち込む。

「二つほど新しい新しい一年生ボーリー！」

「たくさんの部活からこの部活を選んでくれた事に感謝するでー。」

「君の瞳に乾杯」

「うー、なんだよそれ。。。」

そう言って先輩たちは騒いでいた。

そして、俺は固まっていた。。。

そして、後ろからただならぬよね殺氣を感じた。

それを先輩が感じとったのか先輩たちはやつきましたでのテンションをじやなくなつた。

「…………。 なあ、皆俺は一年生の後ろからだだならぬ殺氣を感じんねんけど…………。」

「ああ。」

「……。 その一年生はおおむねこれで」

「ふえ？ あつはー。」 ガツ

そう言つて、先輩は俺の腕をつかんだ。
そして、俺だけ音楽室に入れられた。
そして、先輩は大声で叫んだ

「今だ…… 部室のドアを閉めろ……」

「アイアイサーー！」

先輩たちはいそいでドアを閉めようとした……。
だが、

ガツ

「お前ら……？ いつたい、何をしているんだ？」

先生は笑顔でいつも以上に優しくいっている。
それがいつも以上に怖かった……。

「皆、今やる」とはわかるよな?」

「「おひー。」」

「せーの」

「「すみませんでした……」」

俺は初めてこんなにきれいな土下座を見たかもしない……。

「はあ、わかつたから進藤にこいつに部活の紹介をしていい。」

「わかりました。」

俺は部室の端のほうに呼ばれてこの部活の説明を聞いた。

他にも一年生が来たらしげ、今は各パートの練習を見に行っている

らしい。

「初めまして、俺はこの部活の部長をします。進藤です。楽器はクラリネット吹いてます。」

「おひおい、進藤君？ 下の名前も言つていいんだ？」

「なつ…… 悠斗余計な事をやつくな……」

「ほひほひ」

「薰……ボソッ」

「えつ？」

「もうちょっと大きな声で……」

「ああもう、わかつたがな！ かおるや…… 進藤

薰！ これで

「いこんやひー」

「かおるを聴くでもましたー。」

「うねれー。つい前もつこでり血脉口紹介しつか。」

「うひす まわ 僕は岡村 悠斗 副部長と監のトランジッポン上ogaて
いく係をします まわ 指導楽器はチコーバやで よりしひくな

「悠斗そんな係はない。」

「わかつとゆつて まわ」

「まあ、よのしひな長鳴。」

「はーー。」

楽しい先輩ばっかりだな ま
ちゃんと頑張つてみよう。

部室での出来事（後書き）

進藤
薰

三年生

この部活の部長をしている。

楽器はクラリネットを吹いていて、とても優しい。
だか、怒ると怖い。

下の名前で呼ばれるのを嫌う。

悠斗とは仲が良く大抵は一緒にいる。
しかし、言い合ひは毎日のようにしている。
よく、同期からは吹部のお母さんと呼ばれている。

岡村
悠斗

三年生

この部活の副部長をしている。

楽器はチューバを吹いている。

テンションが高く、緊張している人を見るとすぐにぼぐしにいく。
普段は、こんな性格だか演奏が始まると、薰より怖くスイッチの切り替えがちゃんと出来る人。

優しく、一人一人ちゃんと見ている。

この部活で、薰と二人で夫婦と呼ばれている。

吹奏楽部の先輩

皆とても優しく、テンションが高くて団結力が高い。
なので、ふざける時も一緒に。

「晃くんやつたけ？ 今から、各パート紹介をするな」

「そつまつひ岡村先輩は席を立つた。

「まずは、俺のパートからこいつ。」

「そつまつひ、進藤先輩も席を立つた。

「え～！ かおるとのどこかうなん！」

「かおるん言うなー しゃあないやろ、俺のどこかうのが一番いいしあ前のとこからこいつともあれやろ」

「なつ！？ まあ、お前が言つんやつたら俺はついて行くけどな」

「

「あらがとうな。」

「なんと言つか、仲が良いな」

つか、ラブラン？

いや、それはねえかwww

「まあ、とじあえずこいつを 」

そう言つて先輩は笑顔で俺にいった。

「はい。」

ガラッ

「にしても、晃くんラッキーボーイやな 」

「まあ、確かになwww」

「え？ なんですか？」

「普通にきたやつは俺ら部長、副部長に会つてないねん。」

「そうなんですか？」

「そう緊急部活会議があつて俺たち一年生に会つてないんねんwww

「だから君はラッキーボーイなんやねんなwww」

そう言つて、一人は笑つていた。

俺はラッキーボーイなんか？

そう思いながら先輩の話を聞いていた。

「おつ着いたぞ！」

「ソニーが、俺が担当しているクラリネットパートやで。」

「おじやまします。」

「クラリネットは主にメロディーを担当している楽器や。そして、クラリネットより一回りぐらいたカイ楽器がバスクラリネット。クラリネットより低い音を出す楽器や。」

「つまり、バスクラリネットは低音楽器、クラリネットは高音楽器になるねん」

「へ～」

「次はフルートパートに行こうか。」

「はいー。」

そうこうで、先輩は他に色々なパートを紹介してくれた。

「最後に、俺のパート行つやつで。」

「はいー。」

「悠斗のパートはチューバ。メロディーがなく、伴奏を主に担当している楽器やで。」

「つまり、縁の下の力持ちや、大黒柱、土台つてことやなー。」

「へへ、すいーいんですね。」

「ありがとう。」

「じゃあ、これで全部のパートを紹介したやん?」

あれ?

あの楽器……。

まだ、紹介されてないよな?

「あの、すみません。あの楽器まだ紹介されてないです……。」

「ああ、あの楽器かいな。」

「んじや、紹介したるな。」

なんで、先輩たちはこの楽器を紹介しなかつたんやろ?
ただ、忘れてただけやろ?つか?

最後の一〇

「あの楽器は、ユーフォニウムつていつてな、金管楽器の中低音を担当しとる楽器や。」

「紹介せえへんかったのは、吹いてる人が一人もおらんからやねん。」

えつ、吹いてる人が一人もいない！？
なんでだろ？…。

「長嶋！ 長嶋！ ビーヴしてん？」

「えつ？ あつ、すみません！ あの、吹いてる人が一人もいないつてビーヴこと事ですか？」

「あのな…、ユーフォの子やめてしまつてん…。」

「ついていかれへんくなつてんて…。」

「そりなんですか…。」

「でも、心配する」とはないで…」

「えつ？ なんですか？」

「野川先生おるやん?」

「あの人は実はユーフォ やつとんねんwww」

えつ、野川先生が!?

「それ、マジですか?」

「マジマジおマジwwwwww」

「綺麗な音して、かっこいいねんで!」

野川先生も楽器吹くねんや…

「それは、聞いてみたいですね!」

「でも、俺たちでもあんまり聞いたことないねん…。」

「そうそう、先生なかなか吹いてくれへんねん…。けちやんwww」

なかなか吹いてくれへんねんや…。

でも、先生の吹いてる姿見てみたいな!-

「まあ、運が良かつた晃くんやつたら見れるかもな～～」

「見れたら嬉しいですけどね～～」

「まあ、頑張りや～～」

「わのそりやな、長嶋これで案内終わるけど、質問ある?」

「…あの、初めてなんですかひやんと出来ますかね?」

「当たり前! 皆初めて楽器持った子がたくさんあるで～～ でも、半年もすればつまくなるわ～～」

「初めてでも、安心だから入ってくれよな!」

「はー。」

決めた、やつぱつこの部活でやつて行こ!。

そして、今までの自分を変えてみせるねん!～

「あーーー。」

本日一回田の学校…。

下校時間とっくに過ぎての学校…。

原因は俺が学校に忘れ物をしたから…。

明日取りに行けばいい?

確かにww

でも、あればバレたら没収されるからww

「…しても、何処に落としたんや？…」ここまで探して無かつたら
…。音楽室やんな。」

俺は足を音楽室に向か歩きだした。

「だれにも、アレが見つかってませんよーーー。」

つか、俺先生に見つかったらヤバいよな～ww
てか、音楽室あいてんのかな?
まつ、行ってから今後どうするか決めよ。

「ん？」この音なんや？ 何処から聞こえてくんねん？「

俺は音を頼りに歩いていった。

そしたら、音楽室についた。

「げっ！？ 誰かあるやん！ あかりもバッヂシついとるし、音も…。 いつたい、こんな時間に誰やねん！」

俺は恐る恐るドアを少し開けて部屋の中を覗いてみた。そしたら、そこにいたのは野川先生だった：

「なつ！？ 野川先生！ こんな時間に練習？」

先生は見たことないほど真剣で、同じ所でも出来るまで、何十回も繰り返しやっていた。

「はあ、できねえな…。 つか、コンタクトはきつい！ 眼鏡持つとればよかつたな…。」「

そう言って先生は真剣な顔に戻り、またユーフォを吹いていった。

俺は田が離せなかつた。

つて、こんな事をしている場合ぢやない……
はやく、アレを取りに行かないとい……
でも、どうせいつて……。

「あ～……もう一

俺が叫んだその時だつた……。

「ううせー…… 今何時せとゆづねー…… 下校時間といへば遅れて
んねんデー……」

「あ～、先生……。」

「辰鷦かにな、何しどんねん……」

「ううねー…… 忘れ物をして取りに来ただけやねん……。」

「はー!? …… しゃたないな。はよなかはつて取つてこい……

「!」

「あつがといひれこます……」

チャンス! はやく探し出して没収だけは避けなあかん……

「無い！無い！何処にもない……。」

「なあ、長嶋は何を探してるんや？」

「えっ！？ なんでもいいやないですか」 WWW

「なあ、これじゃ無いよな?」

そう話すと先生はホケットの中からネックレスを取り出した。

「つ――！
それだあ――！――！」

俺は思わず叫んでしまった……。

ハプニング？

ヤバいやばい！

この学校はアクセサリーは禁止で見つけしだい没収なんだよな…。
でも、アレだけは！

「先生！！ それだけは、返してください！」

そう言って、俺は土下座をした。

他人からみたらどれだけ無様だった事だか…。

「先生！ 一生のお願いです！！ それだけはどうか没収しないで
ください！！」

「おい、顔あげろ」

「先生！？」

俺は目を輝かせて先生を見た。

「そんな目をキラキラせんな！ けど、お前もわかつてるだろ？
アクセサリーが見つけしだい没収だって事は…。」

「それだけは、返してください！ お願いします！」

「……。 はあ。 しゃあないな……。 ほら、 そんなに大切な物だ
つたらもう学校に持つてくんないよー！」

「先生ありがとうございます！ 神やわー！」

ガツ

「ふえ！？」

俺は手を伸ばしたその瞬間床に滑つて転けそうになつた！

ヤバい！

転ける！！

バツ

ガタンッ

痛くない？

それも、何か暖かいし柔らかい……。
もしかして！！

目を開けたら人の上に乗ってる事がわかった。

やつぱり、先生にかばつてもらつて…。

「先生！ 大丈夫ですか！？」

「大丈夫大丈夫 WWW それより、お前の方は大丈夫か？」

「大丈夫です…。 本当にすみませんでした！」

「大丈夫だつて WWW」

そう言つて先生は俺の頭を撫でてきた。
そして、笑顔で

「お前が無事ならよかつた…。 だから泣くなや…。」

先生に言われて初めてきずいた。
俺は泣いていた。

「そんなんごどいつだつで…。 先生を下敷きにしで俺…。」

「大丈夫だつてwww ほらピンピンしてるだろ?」

そう言つて先生は立ち上がりて腕や足などを回していた。

「なつ? 大丈夫だろ? それにしても、長嶋はいいやつだな!」

「ふえ? なんでですか?」

「だつて俺のために泣いてくれたんだろ? いいやつじゃないか!」

先生は笑顔でまた頭を撫でてきた…。

「あつありがとう」やれこます。 それに、先生が無事ならよかつた
です!」

「そつかwww つて、時間がヤバいな…。」

「ほんとだ…。」

「送つていつてやるうか?」

「大丈夫です! それより、ネックレスありがとう」やれこました!」

「明日からは持つてくるなよ!」

「はー! それじゅ セヨウナリ!」

はあ、あつてよかつた！
にしても、顔が熱いし、動機も早い……。
俺風邪でもひいたかな？

その時俺はまだ知らなかつた。
それが、恋になるなんて……。

ふあ～

眠い…。

つか、学校まで遠いんだよな…。

「お～～… 長嶋くんおはよっ♪

そう言つて進藤先輩が歩いてきた。

「あ～、ねはよひいざかやー。先輩もいつか方面なんですか？」

「せうやで～～ あつちの角を曲がった所にマンションあるやうに～。
あそこが俺の家やねん～～

「そりなんですか！ 俺の家その近べどす！

「ほんまか～～ んじゅ、や、朝時々会ひやうな～～

「はい… ……。 先輩質問していいですか？」

「どうしたん？」

「岡村先輩と一緒にやないんですか？」

「ああ、あいつは今から迎えに行くねん。」

「ナハリなんですか?」

「ああ、んで毎回遅刻、ギリギリになんねんな。」

「え?」

「あいつ、俺が来たら起き出しへ用意し始めんねん。」

「ははは。それはお疲れ様です。」

「あいつがとうwww んじや、俺は迎えに行くからバイバイ」

「さよなら」

すじこじな。

つか、迎えにまでいくんや。

進藤先輩お母さんみたいやな。

キーンゴーンカーンゴーン
キーンゴーンカーンゴーン

うし、今日の授業は終わった！
吹奏楽部の見学にでも行こうかな！

……。

また、このパターンかよ！
つか、この学校広すぎるんねん！
ほんま無いわ～！

「ん？ 長嶋じゃないか！ どうしたんだ？」
「先生～！ 聞いてください～！」

「そりか～～ また道に迷ったのか～～」

「だつて、この学校広すぎるんですよん！」

「ははははつ　ｗｗ　今度お前が道に迷つたらお前の背中に音楽室までの道を教えてください」とも書いておこうか　ｗｗ

「やめてくださいよ！　そんなことかいたら一生の恥ですよー。」

「ははははつ　ｗｗ　冗談だつて　ｗｗ　あつそつだ、今日は昨日のアレ持つてきてないよな？」

「あたりまえです！　あれは没収されたくないですから…。」

「わうか…。わういえば、長鳴はなんの楽器になつたいんだ？」

「俺はユーフォが吹きたいです！」

「え？　ユーフォが吹きたい！？」

「はい！　昨日先生が吹いているのを見て俺もあんな風に吹きたいつて思つたんです！」

「なんか照れるな　ｗｗ」

「あつ、昨日の日で思い出したんですが、本当に大丈夫でしたか？」

「大丈夫だつて！　俺は頑丈だからーー。」

「それなら良かつたですー！」

「あー、今日は全体で合奏するからちゃんと黙っておけよ。」

「わからましたー。」

「あとで感想をくからなー。」

「マジですかー。」

「おひマジ?」

「だからちゃんと黙っておけよー。」

「はー。」

「今日も先生と話せて楽しいな!
つて、なんでこんな気分になるんだろ?」

入部ーー

あれから数日後、やつとの日がやつてきたー。
俺は心を弾ませて部室に行こうとしていた。
その時、後ろから声をかけられた。

「ねえ、君も音楽室にいへん?」

「誰だこいつ?」。

「困つてゐるだろwww 『ごめんなwww』

「あつ、いやあんたらたちは誰なん?」

「俺は、将つて言つねん んで、そつちが

「俺は、祐つて言つねん。」

「君よく音楽室にゐるやつ? だから、入部する子かなつて思つて
www ちやつ?」

「えつと、やうだけどあんたらもなん?」

「やつやで、なあ行く方向同じやから一緒に行かへん?」

「別にええけどー。」

「せこせこーー、せじやー、一緒に行くやーー。」

「おひめめ

「えじやー、一人は同じ学校なん?」

「わうわう、祐と一緒に学校の学校に行きたくて頑張ってんwww

「仲ええねんなwww

「まあwww

「つて、あなたの名前聞いてなかつたなwww」

「あつ、ほんまやwww 僕の名前は晃つていつねんよひしくなー。」

「よろしくな晃ー。」

「ついたなー。」

「つて、なんで皆教室の外にいるんだ…?」

俺たちが音楽室に着いた時なぜか、一年生であるひつ奴らが音楽室の前に座っていた。

「……。 ねえ、なにしてんの?」

「えつ……。 実は……。」

話を聞くと、音楽室に入ろうとしたら先輩に止められたらしく……。

「んじゃ、しばりく待つ?」

「そだね。」

しばりくすると、誰かが「ひき来た」。

「あれ? 長嶋? それに一年生? 何してんの?」

「あつ、進藤先輩……。 実は……」

俺は先輩に事情を説明した……

隣から聞いていた岡村先輩が

「なんや。 そんな事か。」

「えつ! ？」

俺がおどろいていると進藤先輩が
「大丈夫や WWW 每年何かやんねん WWW ここまで来ると、吹部の
伝統みたくなつてるとこだな WWW」

「そりなんですか…。」

「だから、一年はおとなしく待つとき WWW」

「わかりました…。」

それから、数分たち先輩の一人が

「皆そろつたか？」

「えつと、揃つてるみたいですね…。」

「そりか WWW んじや、入つてくれるか？」

「「はい！」

そして、俺たちの部活が始まった。

入部！！（後書き）

堀山祐
ほりやま ゆう

誰にでも優しく、頭も良い。
将とは昔からなががよい。

山崎将
やまさき ゆう

皆を盛り上げるムードメーカー的なぞんざい。
優しく、話しやすい。

祐とは昔からなががよく、一緒に学校に行きたくて勉強をした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6712y/>

叶わない恋

2011年12月20日21時51分発行